

現代社会

正則高等学校教諭，法政大学非常勤講師

近津 経史



新課程用の教科書がこれまでの教科書ときわだって異なる点は、その第1編にある。目次をご覧くださいと次のようになっている。

第1編 現代に生きるわたしたちの課題

第1章 地球温暖化

1. 地球温暖化とは何か
2. 温暖化防止の取り組みはすすんでいるか
3. 温暖化防止のため何をすべきか

第2章 ごみとリサイクル

1. 家庭から出たごみはどうなるのか
2. 工場から出た廃棄物はどうなるのか
3. 使い捨てを社会を改めよう

第3章 遺伝子技術と生命のゆくえ

1. 遺伝子の解読で何がわかるか
2. 遺伝情報とどう向きあっていくか
3. 人間は遺伝子で決まるのか

第4章 生活のなかの芸術と生活文化（項目、略）

第5章 ゆたかな生活と福祉社会（項目、略）

StudyHall 課題の追究

第1編は、指導要領では、現代社会の諸問題について課題をもうけ、様々な観点から追究する学習を求め、この科目の動機づけや学び方の習得に重点を置くとしている。そして、その課題として地球環境、資源・エネルギー、科学技術の発達と生命、日常生活と宗教・芸術、福祉社会の五つをあげている。いってみれば、この科目の導入として、現代社会の諸課題に対する関心を高め、自ら主体的に学ぶ意欲を育てるとともに、その学習の仕方を学ばせるということである。これまでの受け身と暗記に傾きがちな学習を、課題・調査学習の導入によって克服しようとするものといつてよい。

この第1編の内容と執筆をめぐるのは、執筆者の間でかなりの議論を行った。また編修委員の先生たちの間でもかなりの議論があったと聞いている。それらの議論と数回にわたる原稿審議・改稿を経て、お手元に渡すようなものになった。

第1編は、この教科書のページ数全体の約1/5を占める。従来の教科書とは違って記述は具体的であり、表現はやさしいがかなりつつこんで書いてある。どの項目にも、ずい所に「新しい技術の開発は、とどまる場所がない。人間のクローンをつくることはゆるされるのだろうか」などの問いかけがあり、じっさいの授業では教師と生徒の、あるいは生徒どうしの、かなりのやりとりができるだろう。

また、一つの章の学習を終えたのち、例えば地球温暖化の章では、その学習を手がかりに地域の環境問題を調べたり、さらにはそれを通して酸性雨など地球的規模の環境問題を調べて報告する課題を与えることもできる。その際には、調べ方の方法を記した「StudyHall 課題の追究」が参考となる。あるいは、そうした課題を与えないでも、第1編は、第2編以下の各章・項の導入とすることもできる。

第2編以下は、従来の教科書と大きくは変わらないが、それでもいくつかの工夫を行った。多くの項目の出だしの部分は、「きみには兄弟が何人いるだろうか。友人の兄弟姉妹の数を調べてみよう」とか、「パソコンや携帯電話をインターネットに接続してみよう」などのように、その項目の内容にふさわしい、しかも生徒にとって身近で具体的な記述ではじめている。記述も、中学校を終えたばかりの生徒にふさわしく、できるだけやさしくした。この教科書が生徒の社会科嫌いを無くし、生徒がいきいきと「現代社会」を学ぶ一助になることを願っている。

高校 現代社会

神奈川県立柏陽高等学校

土屋 清



1999年3月に学習指導要領の改訂が行われ、新しい教育課程の基準が示された。新教育課程では、「現代社会」の単位数は、従来の4単位から2単位へと削減され、またそれにともなって学習内容の大幅な精選が行われた。学習の方法についても、選択学習の導入、調査・研究・発表などの学び方の習得、社会事象を総合的に捉える態度と自己のあり方・生き方を主体的に考える生きる力の重視など、従来に見られない新しい視点が示されている。さらに、①現代社会の諸課題についての課題追求学習を踏まえて、②その解決のための方法を考察させ、さまざまな立場から人間としてのあり方生き方を考えさせるという、大項目間に明確な順序指定がなされることで、年間の学習計画の大枠が示されている。

こうした指導要領の原則の中で、生徒の興味関心を喚起するとともに、主体的な学習に役立つ教科書をいかにしてつくるかが、この教科書の構成案をつくる時の最大の課題であった。なかでも大項目1の「現代に生きる私たちの課題」をどう構成するかについては、高校現場での「現代社会」の授業実践を踏まえて、何度も議論を重ね、さまざまなアイデアを持ち寄ることになった。

現行版の『高校現代社会』でも取り入れられていた各章の初めのintroductionや編末のStudy Skillsを、より充実した形で採用した。「復活する路面電車」「16歳投票」「インターネット活用法」などをご覧いただきたい。さらに高校生の具体的な活動にヒントを与えるべく「ACTIVITY—高校生の社会参加」を各編の終わりに置くことにした。「ジュニアインターンシップに参加してみよう」「裁判を傍聴してみよう」などをご覧いただきたい。

大項目1の諸課題についても、指導要領が挙げて

いる5課題（ここには政治分野の学習に直接つながるものがない）に加えて、「分権と市民参加」についての章を設けることで、大項目2で学習する内容への関連づけを強化した。課題学習の具体的事例には、現代社会の倫理・社会・文化・政治・経済などさまざまな側面を示す切り口となるものを取り上げ、単に資料や図版の羅列ではなく、読みごたえのある物語となるよう心がけた。

大項目2の「現代社会と青年」「現代の経済社会」「民主政治と倫理」「国際社会と日本の役割」についても、随所に新しい状況と課題に踏み込んだ記述をめざした。ケータイやネット犯罪、フリーターやパラサイトシングル、やさしさの精神病理など、現代の青年をとりまく諸問題にも多くの箇所に触れている。経済分野の学習の最後に福祉社会の実現を取り上げて、経済学習の目的を明確にしている。憲法と人権・平和の学習については、多くの頁をあて、詳細に論ずるとともに、現実の諸問題に鋭く切り込むことをめざした。安全保障や防衛問題についても、歴史的経緯と現状について多くの記述をした。

この教科書の特徴は、現代社会の諸問題に対して、闇雲な現状肯定や安易な解決提示に終わったり、性急な反抗や絶望に陥ったりするのではなく、社会の現状や問題点に対する詳細な分析に基づいて、問題解決に向けての理性的な展望を示すことにある。口絵写真で取り上げた日本の世界遺産をはじめとして、全編に配置したフルカラーの写真・図版を見ていただくとともに、本文の記述をじっくりと読み進むことにより、現代社会の諸課題を理性的に考えるための手がかりとしていただければ、この教科書のめざしている目標が達成されることになるであろう。

新教育課程用教科書執筆にあたって

世界史A

神奈川県立新羽高等学校教諭
岡田 健

新教育課程に向けて、学校現場では新カリキュラムの詰めが行われているが、週休二日制、総合的な学習の時間などにより、1科目あたりの単位数は圧縮されがちである。このような中で、世界史Aを必修、世界史Bを選択として2科目セットで受験に対応する、という学校もあると聞いている。また、2単位で世界史Aを学びきることが難しいため、授業の進め方にも様々な工夫があるようだ。

『世界史A』の執筆に際してまず留意したことは、生徒にとってこの科目が、世界の歴史を学ぶ最初の機会だということである。従って、「理解しやすく親しみやすい」ということを大前提とした。と同時に上述のような事情に鑑みて、多様な使用方法に耐えうる柔軟な教科書を作ることをめざした。

「第I部 諸地域世界と交流圏」は、世界史Aの導入部である。側注を精選して数多く掲載した鮮明なカラー写真や、「漢字」「カースト制」「陶磁器の道」等のコラムは生徒の興味を引き出す上で大きな力を発揮するであろう。また第I部は、特に様々な使用方法が想定される部分である。そこで各章の扉や各節ごとに、学習内容のまとめを図示して授業時間の短縮に活用できるようにしている。一方で本文には通史的な要素をあえて多く盛り込み、近世以前に力を入れた授業にも対応できるようにした。

第II部以降にもコラムや図表・図版を多用して、生徒の理解を助ける工夫をしていることはいうまでもない。また20世紀史を扱う第III部には全体の約4割のページを充て、現行の『世界史A』の現代史重視の方針を継承している。とはいえ、第III部も授業時間の関係で急いで学習させなければならない場合が多い。そのようなときに利用できる戦後史の流れを1ページにまとめた図表も用意している。

学校や生徒の状況に、また教員の個性に応じて工夫され、進化していくどのような授業にも対応できる、見やすく読みやすい教科書を作ることに努めてきたつもりである。

世界史B

長野県松本深志高等学校教諭
小川 幸司

本書を何気なく手にとってペラペラとページをめくった先生方が、思わず読み入ってしまうような教科書を作りたい。そんな思いで私は仕事を進めてきた。

本書の構成は、先生方が副教材と併用しながら授業を進めやすいように、きわめてオーソドックスな章編成である。しかしそのなかで、受験に対応できる用語・記述を網羅するにしたばかりでなく、新しい歴史像と旧来のそれが無理なく接続できるような工夫とともに「新しい記述」を試みている。そして、歴史を学ぶことで現代世界や人間のありかたに考察が及ぶような教科書をめざしている。

一例を挙げよう。近代ヨーロッパの「主権国家の誕生」に関する記述を読んでいただきたい。新学習指導要領で強調されている「主権国家」という概念だが、これを使うと歴史がどのように見えるようになってくるか、そして主権国家は絶対主義・市民革命・国民国家といった問題群とどう関わってくるか…そういったことを深く踏み込んで記述した。近年増加している小論文入試にも対応できるような、歴史の構造的理解へのきっかけとなればいいと思っている。

別の例をもう一つ。「19世紀イギリス史」を参照していただきたい。穀物法廃止がアイルランド農業に大きな打撃を与えたこと、ジェントリは金融業界に進出してジェントルマン資本主義が形成されていたことを、私たちは記述している。高校生のほとんどが観るであろう映画『タイタニック』のなかのアイルランド移民がいかに生まれ、あのジェントリの社交界がなぜ存続していたかの一端が、私たちの教科書から読み取れるのではないと思う。

オーソドックスに学び、ハイレベルな学力が身につく、歴史を学ぶ面白さに目覚めるような教科書…それが第一線の歴史学者と高校教師の共同作業による、私たちの『世界史B』の特色だと自負している。是非、手にとってご覧いただきたいし、今後のさらなるグレードアップのためにご高評を賜りたいと願っている。

● 新教育課程用教科書執筆にあたって

高校日本史A

元千葉大学教授
宮原 武夫

新しい学習指導要領によって、「日本史A」の内容が大きく変化し、主題学習である「歴史と生活」を、教科書の冒頭に記述することになった。それは、衣食住の変化、交通・通信の変化、現代に残る風習と民間信仰、産業技術の発達と生活、地域社会の変化の5主題である。生徒の歴史への関心、歴史的な見方や考え方を、体験的・作業的な学習を通して身に付けさせるために、新たに導入された単元である。本書では、この単元の重要性から、十分な分量をあてて例示した。

たとえば、東京近郊の新京成電鉄の線路にカーブが多いのはなぜかを追究して陸軍の歴史に迫るとか、学校にはなぜ制服があるのだろうかという疑問から出発して、近代の学校の性格に迫るとか、生徒の住んでいる地域の歴史調べとか、生徒の自主的な自由研究としても取り組める主題を例示した。

また、新学習指導要領では、「日本史A」の内容は近現代史に限定され、前近代史は扱えなくなった。本書は、この近現代史を3章49節に構成し、49時間で扱えるようにした。各節の名称は、「明治維新と新政府の成立」「日中戦争」「日本国憲法と民主教育」などとした。そこでの学習課題である「年貢半減はなぜ実現しなかったのか」「日本軍は中国でなにをしたのか」「新憲法をうみだした力はなにか」などは、副題として示すにとどめた。記述の内容は『高校日本史B』と同一のレベルである。

さらに、各節には「歴史のまど」を設定した。限られたページ数のなかで、研究蓄積の豊かな歴史を記述しようとする、どうしても抽象的な言葉を使わざるを得なくなる。宇宙から人々の生活を覗くような記述になりがちである。このような教科書の宿命を少しでも改善し、生徒の歴史に対する興味・関心を引き出すために、歴史のひとつまで、地上に降り立って、歴史上の事件や人物の具体的な姿に接近する試みとして設けたのが「歴史のまど」である。

政治・経済

東京都立蔵前工業高等学校
高橋 朝子

「quality・lately・handy」

これが新課程用「政治・経済」のセールスポイントである。内容の充実(quality)をはかり、最新の動向(lately)を取り込み、そして、見やすく使いやすい(handy)教科書の執筆・編修を心がけた。

具体的な特長は、以下の通りである。

○各章のはじめに、**introduction**を設けた。例えば、第2編第3章のintroductionでは、身近になったインターネットショッピングや外貨預金をきっかけとして、巨額のマネーが外国為替市場を駆けめぐるダイナミズムを取り上げ、生徒が、これから学習する内容に関心を抱くよう工夫した。

○指導要領の改訂の目玉である「第3編 現代社会の諸課題」に、多くの工夫を凝らした。

(1)口絵で8ページもの写真を折り込み、視覚的な印象を強め、学習意欲の向上をねらった。

(2)各テーマについて、対立する二つの意見を、見開き2ページでわかりやすくまとめた。

(3)指導要領が指摘している15の課題に、死刑制度と日米新ガイドラインを加え、17テーマとした。

(4)編のはじめに**workshop**を設け、情報の収集や意見のまとめ方をアドバイスするとともに、テーマごとにおかれた**for study**で、課題追究学習のための視点を示唆した。

○最新のデータを用いるとともに、変化の激しい国際政治や国際経済分野で、重要性を増している出来事、情勢を、丁寧に記述した。

○全編を通じて、図版・写真を多く取り入れ、見やすい・使いやすいデザインの教科書にした。特に、裏見返しの**日本と世界の年表**は、自信作である。

この教科書が、現代の社会に目を開き、自ら考えようとする生徒たちの一助になれば、幸いである。